

与謝野晶子 訳

# 源氏物語

行幸卷



一冊堂青空文庫



源氏物語

行幸

紫式部

與謝野晶子訳

雪ちるや日よりかしこくめでたさも上

なき君の玉のおん輿こし

(晶子)

源氏は玉鬘たまかみに對してあらゆる好意を尽くしているのであるが、人知れぬ恋を持つ点で、南の女王にょおうの想像したとおりの不幸な結末を生むのではないかと見えた。すべてのことに形式を重んじる癖があつて、少しでもその点の不足したことは我慢のならぬように思う内大臣の性格であるから、思いやりもなしに婿として麗々しく扱われるようなことになつては今さら醜態で、氣恥ずかしいことであると、その懸念けねんがいささか源氏を躊躇ちゅうちよさせていた。

この十二月に洛西らくさいの大原野の行幸みゆきがあつて、だれも皆お行列の見物に出た。六条院か

らも夫人がたが車で拝見に行った。帝は午前六時に御出門になって、朱雀大路から五条通りを西へ折れてお進みになった。道路は見物車でうずまるほどである。行幸と申しても必ずしもこうではないのであるが、今日は親王がた、高官たちも皆特別に馬鞍を整えて、隨身、馬副男の背丈までもよりそろえ、装束に風流を尽くさせてあった。左右の大臣、内大臣、納言以下はことごとく供奉したのである。浅葱の色の袍に紅紫の下襲を殿上役人以下五位六位までも着ていた。時々少しずつの雪が空から散って艶な趣を添えた。親王がた、高官たちも鷹使いのたしなみのある人は、野に出てからの用にきれいな狩衣を用意していた。左右の近衛、左右の衛門、左右の兵衛に属した鷹匠たちは大柄な、目だつ摺衣を着ていた。女の目には平生見馴れない見物事であったから、だれかれとなしに競って拝観をしようとしたが、貧弱にできた車などは群衆に輪をこわされて哀れな姿で立っていた。桂川の船橋のほとりが最もよい拝観場所で、よい車がここには多かった。六条院の玉鬘の姫君も見物に出ていた。きれいな身なりをして化粧をした朝臣たちをたくさん見たが、緋のお上着を召した端麗な鳳輦の中の御姿になぞらえることのできるような人はだれもない。玉鬘は人知れず父の大臣に注意を払ったが、噂どおりにはなやかな貫禄のある盛りの男とは見えしたが、それも絶対なりつぱさとはいえるもので

なくて、だれよりも優秀な人臣と見えるだけである。きれいであるとか、美男だとか  
いって、若い女房たちが蔭かげで大騒ぎをしている中将や少将、殿上役人のだれかれなどは  
まして目にもたたず無視せざるをえないのである。帝は源氏の大臣にそっくりなお顔で  
あるが、思いのほか一段崇高な御美貌びぼうと拝びされるのであった。でこれを人間世界の最も  
すぐれた美と申さねばならないのである。貴族の男は皆きれいなものであるように玉鬘  
は源氏や中将を始終見て考えていたのであるが、こんな正装の姿は平生よりも悪く見え  
るのか、多数の朝臣たちは同じ目鼻を持つ顔とも玉鬘には見えなかった。兵部卿ひょうぶきやうの宮も  
おいでになった。右大將は羽振りのよい重臣ではあるが今日の武官姿の纓えいを巻いて胡やなぐい※  
を負った形などはきわめて優美に見えた。色が黒く、髭ひげの多い顔に玉鬘は好感を持てな  
かった。男は化粧した女のような白い顔をしているものでないのに、若い玉鬘の心はそ  
れを輕蔑けいべつした。源氏はこのごろ玉鬘に宮仕えを勧めているのであった。今までは自発的  
にお勤めを始めるのでもなしにやむをえずに御所の人々の中に混じって新しい苦勞を買  
うようなことはと躊躇する玉鬘であったが、後宮の一人でなく公式の高等女官になって  
陛下へお仕えるのはよいことであるかもしれないと思うようになった。大原野で鳳輦ほうれん  
が停とどめられ、高官たちは天幕の中で食事をしたり、正装を直衣のうしや狩衣に改めたりしてい

るころに、六条院の大臣から酒や菓子の献上品が届いた。源氏にも供奉ぐふすることを前に仰せられたのであるが、謹慎日であることによつて御辞退をしたのである。蔵人くらうじんの左衛門尉のじようを御使みついにして、木の枝に付けた雉子きじを一羽源氏へ下された。この仰せのお言葉は女である筆者が採録申し上げて誤りでもあつてはならないから省く。

雪深きをしほの山に立つ雉子の古き跡をも今日けふはたづねよ

御製はこうであつた。これは太政大臣が野の行幸にお供申し上げた先例におよびなつたことであるかもしれない。

源氏の大臣は御使いをかしこんで扱つた。お返事は、

小塩山をしほみゆき積もれる松原に今日ばかりなる跡やなからん

という歌であつたようである。筆者は覚え違いをしているかもしれない。その翌日、源氏は西の対へ手紙を書いた。

昨日<sup>きのう</sup>陛下をお拝みになりましたか。お話していたことはどう決めますか。

白い紙へ、簡単に氣どった跡もなく書かれているのであるが、美しいのをながめて、「ひどいことを」

と玉鬘<sup>たまかづら</sup>は笑っていたが、よくも心が見透かされたものであるという氣がした。

昨日は、

うちきらし朝曇りせしみゆきにはさやかに空の光やは見し

何が何でございますやら私などには。

と書いて来た返事を紫の女王<sup>にょおう</sup>もいっしょに見た。源氏は宮仕えを玉鬘に勧めた話をした。

「中宮<sup>ちゅうぐう</sup>が私の子になっておいでになるのだから、同じ家からそれ以上のことがなくて出て行くのをあの人は躊躇することだろうと思うし、大臣の子として出て行くのも女御<sup>にょぎ</sup>がいられるのだから不都合だしと煩悶<sup>はんもん</sup>しているそのことも言っているのですよ。若い女で宮中へ出る資格のある者が陛下を拝見しては御所の勤仕を断念できるものでないはず

だ」

と源氏が言うのと、

「いやなあなた。お美しいと拝見しても恋愛的に御奉公を考えるのは失礼すぎたことじゃありませんか」

と女王は笑った。

「そうでもない。あなただつて拝見すれば陛下のおそばへ上がりたくなくなりますよ」  
などと言いながら源氏はまた西の対へ書いた。

あかねさす光は空に曇らぬをなどてみゆきに目をきらしけん

ぜひ決心をなさるように。

こんなふうに言つて源氏は絶えず勧めていた。ともかくも裳着もぎの式を行なおうと思つて、その儀式の日の用意を始めさせた。自身ではたいしたことにはしようとしないうちで、源氏の家で行なわれることは自然にたいそうなものになつてしまふのであるが、今度のことはこれを機会に内大臣へほんとうのことを知らせようと期している式であつた



から、きわめて華美な支度したくになつていった。来春の二月にしようと源氏は思つてゐるのであつた。女は世間から有名な人にされていても、まだ姫君である間は必ずしも親の姓氏を明らかに掲げている必要もないから、今までは藤原ふじわらの内大臣の娘とも、源氏の娘とも明確にしないで済んだが、源氏の望むように宮仕えに出すことにすれば春日かすがの神の氏の子を奪うことになるし、ついに知れるはずのものをしいて当座だけ感情の上からごまかしをするのも自身の不名誉であると源氏は考えた。平凡な階級の人は安易に姓氏を変えたりもするが、内に流れた親子の血が人為的のことで絶えるものでないから、自然のままに自分の寛大さを大臣に知らしめようと源氏は決めて、裳もの紐ひもを結ぶ役を大臣へ依頼することにしたが、大臣は、去年の冬ごろから御病氣をしておいでになる大宮が、いつどうおなりになるかもしれない場合であるから、祝儀のことに出るのは遠慮をすると辞退してきた。中將も夜昼三条の宮へ行つて付ききりのようにして御介抱かいほうをしていて、何の余裕も心にないふうな時であるから、裳着は延ばしたものであらうかとも源氏は考えたが、宮がもしお薨かくれになれば玉鬘たまむすひは孫としての服喪の義務があるのを、知らぬ顔で置かせては罪の深いことにもなろうから、宮の御病氣を別問題として裳着を行ない、大臣へ真相を知らせることも宮の生きておいでになる間にしようと源氏は決心して、三条の

宮をお見舞いしがてらにお訪ねした。微行<sup>しのび</sup>として来たのであるが行幸<sup>みゆき</sup>にひとしい威儀が知らず知らず添っていた。美しさはいよいよ光が添ったようなこのごろの源氏を御覧になったことで宮は御病苦が取り去られた気持ちにおなりになって、脇息<sup>きょうでく</sup>へおよりかかりになりながら、弱々しい調子ながらもよくお話しになった。

「そうお悪くはなかったのでございますね。中将がひどく御心配申し上げてお話をいたすものですから、どんなふうでいらっしゃるのかとお案じいたしておりました。御所などへも特別なことのない限りは出ませんで、朝廷の人のようでもなく引きこもっておりまして、自然思いましてもすぐに物事を実行する力もなくなりまして失礼をいたしました。年齢などは私よりもずっと上の人がひどく腰をかがめながらもお役を勤めているのが、昔も今もあるでしょうが、私は生理的にも精神的にも弱者ですから、怠<sup>なま</sup>けることよりできないのでございましょう」

などと源氏は言っていた。

「年のせいだと思ひましてね。幾月かの間は身体<sup>からだ</sup>の調子の悪いのも打ちやってあったのですが、今年になってからはどうやらこの病氣は重いという気がしてきましてね、もう一度こうしてあなたにお目にかかることもできないままになってしまふのかと心細かつ

たのですが、お見舞いくださいましたこの感激でまた少し命も延びる気がします。もう私は惜しい命では少しもありません。皆に先だたれましたあとで、一人長く生き残っていることは他人のことで見てもおもしろくないことに思われたことなのですから、早くと先を急ぐ気にもなるのですが、中將がね、親切にね、想像もできないほどよくしてくれましてね、心配もしてくれますのを見ますとまた引き止められる形にもなっております」

初めから終わりまで泣いてお言いになるそのお慄え声もこの場合に身に沁しみんで聞かれた。昔の話も出、現在のことも語っていたついでに源氏は言った。

「内大臣は毎日おいでになるでしょうが、私の伺っておりますうちにもしおいでになることがあればお目にかかれて結構だと思えます。ぜひお話しておきたいこともあるのですが、何かの機会がなくてはそれもできませんで、まだそのままになっております」

「お上かみの御用が多いのか、自身の愛が淡いうすのか、そうそう見舞ってくれません。お話しになりたいとおっしゃるのはどんなことでしょう。中將が恨めしがっていることもあるのですが、私は何も初めうしろめのことは知りませんが、冷淡な態度をあの子にとるのを見ていますね、一度立たった噂うわさはそんなことで取り返されるものではなし、かえって二重に人

から譏<sup>そし</sup>らせるようなものだ。私は忠告もしましたが、昔からこうと思ったことは曲げられない性質でね、私は本意に傍観しています」

大宮が中將のことであろうとお解しになって、こうお言いになるのを聞いて、源氏は笑いながら、

「今さらしかたのないこととして許しておやりになるかと思ひまして、私からもそれとなく希望を述べたこともあるのですが、断然お引き分けになろうとするお考えらしいのを見まして、なぜ口出しをしたかときまり悪く後悔をしております。まあ何事にも清めということがございますから、噂などは大臣の意志で消滅させようとすればできるかもしれぬとは見ていますが事実であつたことをきれいに忘れさせることはむずかしいでしょうね。すべて親から子と次第に人間の価値は落ちていきまして、子は親ほどだれからも尊敬されず、愛されもしないのであると中將を哀れに思っております」

などと言つたあとで源氏は本問題の説明をするのであつた。

「大臣にお話ししたいと思ひますことは、大臣の肉身の人を、少し朦朧<sup>もうろう</sup>としました初めの関係から私の娘かと思ひまして手もとへ引き取つたのですが、その時には間違ひであることも私に聞かせなかつたものですから、したがってくわしく調べもしませんで子供

の少ない私ですから、縁があればこそと思ひまして世話をいたしかけたものの、そう近づいて見ることもしませんで月日がたつたのですが、どうしてお耳にはいったのですか、宮中から御沙汰ごさたがありましてね、こう仰せられるのです。尚侍なしのかみの職が欠員であることは、そのほうの女官が御用をするのにたよる所がなくて、自然仕事が投げやりになりやすい、それで今お勤めしている故参の典侍二人なしのすけ、そのほかにも尚侍になろうとする人たちの多い中にも資格の十分な人を選び出すのが困難で、たいてい貴族の娘の声望のある者で、家庭のことに携わらないでいい人というのが昔から標準になっているのですから、欠点のない完全な資格はなくても、下の役から勤め上げた年功者の登用される場合はあつても、ただ今の典侍にまだそれだけ力がないとすれば、家柄その他の点で他から選ばなければならぬことになるから出仕をさせるようにというお言葉だったので。私の家の子が相応しないことも思うわけのものでございせんから、私も宮中の仰せをお受けしようという氣になつたのでございます。宮仕えというものは適任者であると認められれば役の不足などは考えるべきことではありません。後宮ではなしに宮中の一課をお預かりしているいろいろな事務も見なければならぬことは女の最高の理想でないように思う人はあつても、私はそうとも思っておりません。仕事は何であつてもその

人格によつてその職がよくも見え、悪くも見えるのであると、私がそんな氣になりました時に、娘の年齢のことを聞きましたことから、これは私の子でなくてあの方のだということがわかつたのです。なおお目にかかりましてその点なども明瞭めいりょうにいたしたいと思っています。機会がなくてはお目にかかれませんか、おいでを願つてこの話を申し上げようといりましたところ、あなた様の御病氣のことをお言い出しになりましたとお断わりのお返事をいただいたのですが、それは實際御遠慮申すべきだと思いますもの、こんなふうにおよろしいところを拝見できたのですから、やはり計画どおりに祝いの式をさせたいと思うのです。内大臣にもやはりその節御足労を願いたいと思うのですが、あなた様からいくぶんそのこともおにおわしになつたお手紙をお出しくださいませんか」

と源氏は言うのであつた。

「まあそれは思いがけないことでございますね。内大臣の所ではそうした名のりをして来る者は片端から拾うようにしてよく世話をしているようですがね、どうしてあなたの所へ引き取られようとしたのでしょうか。前から何かのお話を聞いて出て来た人なのですか」

「そうなつていく訳がある人なのです。くわしいことは内大臣のほうがよくおわかりに

なるくらいでしょう。凡俗の中の出来事のように、明らかにすればますます人が噂うわさに上せたがりそうなことと思われましますから、中将にもまだくわしく話してございません。あなた様も秘密にあそばしてください」

と源氏は注意した。

内大臣のほうでも源氏が三条の宮へ御訪問したことを聞いて、

「簡単な生活をしていらつしやる所では太政大臣の御待遇にお困りになるだろう。前驅の人たちを饗応きやうおうしたり、座敷のお取りもちをする者もはかばかしい者がいないであろう、中将は今日はお客側のお供で来ていられるだろうから」

すぐに子息たちそのほかの殿上役人たちをやるのであった。

「お菓子とか、酒とか、よいようにして差し上げるがいい。私も行くべきだがかえつてたいそうになるだろうから」

などと言っている時に大宮のお手紙が届いたのである。

六条の大臣が見舞いに来てくださったのですが、こちらは人が少なくてお恥ずかしくもあり、失礼でもありますから、私がわざとお知らせしたというふうでなしに来てくださいませんか。あなたとお逢あいになつてお話しなさいたいこともあるようです。

と書かれてあつた。何であろう、雲井くもいの雁かりと中将の結婚を許せということなのであるうか、もう長くおいでになれない御病体の宮がぜひにとそのことを言いになり、源氏の大臣が謙遜けんそんな言葉で一言その問題に触れたことをお訴えになれば自分は拒否のしようがない。中将が冷静で、あせつて結婚をしようとしなのを見ていることは自分の苦痛なのであるから、いい機会があれば先方に一步譲つた形式で許すことにしよう大臣は思つた。そしてそれは大宮と源氏が合議されてのことであるに違いないと氣のついた大臣は、それであればいっそう否みよふの事であると思はれるが、必ずしもそうではないと思つた。こうした時にちよつと反抗的な氣持の起るのが内大臣の性格であつた。しかし宮もお手紙をおつかわしになり、源氏の大臣も待つておいでになるらしいから伺わないでは双方へ失礼である。ともかくもその場になつて判断をすることにしようと思つて、内大臣は身なりを特に整えて前驅などはわざと簡單にして三条の宮へはいつた。子息たちをおおぜい引きつれている大臣は、重々しくも頼もしい人に見えた。背の高さに相応して肥ふとつた貫祿かんろくのある姿で歩いて来る様子は大臣らしい大臣であつた。紅紫の指貫さしめきに桜の色の下襲したかきねの裾すそを長く引いて、ゆるゆるとした身のとりなしを見せていた。なんというりっぱな姿であらうと見えたが、六条の大臣は桜の色の支那錦しなにしきの直衣のうしの下に



淡色うすいろの小袖こそでを幾つも重ねたくつろいだ姿でいて、これはこの上の端麗なものはないと思われるのであった。自然に美しい光というようなものが添っていて、内大臣の引き繕った姿などと比べる性質の美ではなかった。おおぜいの子息たちがそれぞれりっぱになっていた。藤大納言とうどう、東宮大夫たいうなどという大臣の兄弟たちもいたし、藏人頭くろうどのかみ、五位の藏人、近衛このえの中少将、弁官などは皆一族で、はなやかな十幾人が内大臣を取り巻いていた。その他の役人もついて来ていて、たびたび杯がまわるうちに皆酔いが出て、内大臣の豊かな幸福をだれもだれも話題にした。源氏と内大臣は珍しい会合に昔のことが思い出されて古いころからの話がかわされた。世間で別々に立っている時には競争心というようなものも双方の心に芽ぐむのであるが、一堂に集まってみれば友情のよみがえるのを覚えるばかりであった。隔てのない会話の進んでいく間に日が暮れていった。杯がなお人々の間に勧められた。

「伺わないでは済まないのですが、今日来いというようなお召しがないものですから、失礼しております、お叱りしかを受けそうでなりません」

と内大臣は言った。

「お叱りは私が受けなければならぬと思っ

と意味ありげに源氏の言うのを、先刻から考えていた問題であろうと大臣はとって、ただかしこまっていた。

「昔から公人としても私人としてもあなたとほど親しくした人は私にありません。翹はねを並べるといふようにして将来は国事に携わろうなどと当時は思ったものですがね、のちになるとお互いに昔の友情としては考えられないようなこともしますからね。しかしそれは区々たることですよ。だいたいの精神は少しも昔と変わっていないのですよ。いつの間にかとった年齢としを思いましても昔のことが恋しくてなりませんが、お逢あいのできることもまれにしかありませんから、勝手な考えですが、私のように親しい者の所へは微し行びでもお訪たずねくださればいいと恨めしい気になっている時もあります」

と源氏が言った。

「青年時代を考えてみますと、よくそうした無礼ができたものだと思いますほど親しくさせていただきまして、なんらの隔てもあなた様に持つことがありませんでした。公人といったしましては翹はねを並べるとお言いになりますような価値もない私を、ここまで引き立てくださいました御好意を忘れるものでございせんが、多い年月の間には我知らずよろしくないことも多くいたしております」

などと大臣は敬意を表しながら言っていた。この話の続きに源氏は玉鬘たまかすらのことを内大臣に告げたのであった。

「何たることでしよう。あまりにうれしい、不思議なお話を承ります」と大臣はひとしきり泣いた。

「ずっと昔ですが、その子の居所が知れなくなりましたことで、何のお話の時でしたか、あまりに悲しくてあなたにお話ししたこともある気がいたします。今日私もやっと人数ひとかずになってみますと、散らかっております子供が気になりました、正直に拾い集めてみますと、またそれぞれ愛情が起こりまして、皆かわいく思われるのですが、私はいつもそうしていながら、あの子供を最も恋しく思い出されるのでした」

この話から、昔の雨夜の話に、いろいろと抽象的に女の品定めしなさだをしたことも二人の間に思い出されて、泣きも笑いもされるのであった。深更になってからいよいよ二人の大臣は別れて帰ることになった。

「こうしてごいっしょになることがありますと、当然なことですが昔が思い出されて、恋しいことが胸をいっぱいにして、帰って行く気になれないのですよ」

と言って、あまり泣かない人である源氏も、酔い泣きまじりにしめっぱいふうを見せ

た。大宮は葵夫人あおいのことをまた思い出しておいでになった。昔のはなやかさを幾倍したものともしれぬ源氏の勢いを御覧になって、故人が惜しまれてならないのでおありになった。しとおとお泣きになった、尼様らしく。

源氏はこうした会見にも中将のことは言い出さなかった。好意の欠けた処置であると感じた事柄であつたから、自身が口を出すことは見苦しいと思つたのであつた。大臣のほうでは源氏から何とも言わぬ問題について進んで口を切ることもできなかったのである。その問題が未解決で終わつたことは愉快でもなかった。

「今晚お邸やしきまでお送りに参るはずですが、にわかになんかことをいたしますのも人騒がせに存ぜられますから、今日のお礼はまた別の日に参上して申し上げます」

と大臣が言うのを聞いて、それでは宮の御病氣もおよろしいように拝見するから、きつと申し上げた祝いの日に御足労を煩わしたいということを源氏は頼んで約束ができた。非常に機嫌きげんよく大臣たちは会見を終えて宮邸を出るのであつたが、その場にもまたいかめしい光景が現出した。内大臣の供をして来た公達きんたちなどはたまさかの会合が朗らかに終わつたのは何の相談があつたのであろう、太政大臣は今日もまた以前のように内大臣へ譲ることが何かあつたのではないかなどという臆測おくそくをした。玉鬘のことであらうな

どとはだれも考えられなかったのである。

内大臣は源氏の話を聞いた瞬間から娘が見たくてならなかった。逢<sup>あ</sup>わないでいることは堪えられないようにも思うのであるが、今すぐに親らしくふるまうのはいかなものである、自家へ引き取るほどの熱情を最初に持った源氏の心理を想像すれば、自分へ渡し放しにはしないであろう、りっぱな夫人たちへの遠慮で、新しく夫人に加えることはしないが、さすがにそのままで情人としておくことは、実子として家に入れた最初の態度を裏切ることになる世間体をはばかつて、自分へ親の権利を譲ったのであろうと思うと、少し遺憾な気も内大臣はするのであったが、自分の娘を源氏の妻に進めることは不名誉なことであるはずもない、宮仕えをさせると源氏が言い出すことになれば女御<sup>にようぎ</sup>とそ  
の母などは不快に思うであろうが、ともかくも源氏の定めることに随<sup>したが</sup>うよりほかはないと、こんなことをいろいろと大臣は思った。これは二月の初めのことである。十六日からは彼岸<sup>こよみ</sup>になって、その日は吉日でもあったから、この近くにこれ以上の日がないとも暦<sup>はか</sup>の博士<sup>かせ</sup>からの報告もあつて、玉鬘<sup>たまむすむ</sup>の裳着<sup>もぎ</sup>の日を源氏はそれに決めて、玉鬘へは大臣に知らせた話<sup>たまひ</sup>もして、その式についての心得も教えた。源氏のあたたかい親切は、親であつてもこれほどの愛は持つてくれないであろうと玉鬘にはうれしく思われたが、しか

も実父に逢う日の来たことを何物にも代えられないように喜んだ。その後、源氏は中将へもほんとうのことを話して聞かせた。不思議なことであると思つたが、中将にはもつともだと合点されることもあつた。失恋した雲井くもいの雁かりよりも美しいように思われた玉鬘たまごの顔を、なお驚きに呆然ぼうぜんとした気持ちの中にも考えて、気がつかなくつたと思わぬ損失を受けたような心持ちにもなつた。しかしこれはふまじめな考えである、恋人の姉妹ではないかと反省した中将はまれな正直な人と言ふべきである。

十六日の朝に三条の宮からそつと使いが来て、裳着くの姫君への贈り物の櫛くの箱などを、にわかなことではあつたがきれいにできたのを下された。

手紙を私がおあげするのも不吉にお願いにならぬかと思ひ、遠慮をしたほうがよろしいとは考えるのですが、大人おとなにおなりになる初めのお祝いを言わせてもらうことだけは許していただけるかと思つたのです。あなたのお身の上の複雑な事情も私は聞いていますことを言つてよろしいでしょうか、許していただければいいと思います。

ふたかたに言ひもてゆけば玉櫛たまぐしげ笥わがみはなれぬかけごなりけり

と老人の慄ふるえた字でお書きになったのを、ちょうど源氏も玉鬘たまむすのほうにいて、いろいろな式のことの指図さしずをしていた時であったから拝見した。

「昔風なお手紙だけれど、お気の毒ですよ。このお字ね。昔は上手じょうずな方だったのだけれど、こんなことまでもおいおい悪くなってくるものらしい。おかしいほど慄ふるえている」と言つて、何度も源氏は読み返ししながら、

「よくもこんなに玉櫛たまき笥にとらわれた歌が詠よめたものだ。三十一文字の中にほかのことは少ししかありませんからね」

そつと源氏は笑っていた。中宮ちゅうぐうから白い裳も、唐衣からぎぬ、小袖こそで、髪上げくしあの具などを美しくそろえて、そのほか、こうした場合の贈り物に必ず添うことになっている香の壺つぼには支那しなの薫香くんこうのすぐれたのを入れてお持たせになった。六条院の諸夫人も皆それぞれの好みで姫君の衣裳いしやうに女房用の櫛や扇までも多く添えて贈った。劣り勝りまさもない品々であった。聡明そうめいな人たちが他と競争するつもりで作りととのえた物であるから、皆目と心を樂しませる物ばかりであった。東の院の人たちも裳着もぎの式のあることを聞いていたが、贈り物を差し出だすことを遠慮していた中で、末摘花夫人すえつむはなは、形式的に何でもしなはいられぬ昔風な性質から、これをよそのことにしては置かれなと正式に贈り物をこしら

えた。愚かしい親切である。青鈍色あおにびの細長、落栗色おちぐりとか何とかいつて昔の女が珍重した

色合はかまいの袴一具、紫が白けて見える霞地あられじの小桂こうちぎ、これをよい衣裳箱に入れて、たいそうな包み方たまかたもして玉鬘たまかむらへ贈つて来た。手紙には、

ご存じになるはずもない私ですから、お恥ずかしいのですが、こうしたおめでたいことは傍観してられない氣になりました。つまらない物ですが女房にでもお与えください。

とおおように書かれてあつた。源氏はその来ているのを見て氣まずく思つて例のよけいなことをする人だと顔が赤くなつた。

「これは前代の遺物のような人ですよ。こんなみじめな人は引き込んだままにしているほうがいいのに、おりおりこうして恥をかきに來られるのだ」

と言つて、また、

「しかし返事はしておあげなさい。侮辱されたと思うでしょう。親王さんが御秘藏になすつたお嬢さんだと思つと、輕蔑けいべつしてしまうことのできない、哀れな氣のする人ですよ」

とも言うのであつた。小桂の袖の所にいつも変わらぬ末摘花の歌が置いてあつた。



わが身こそうらみられけれ唐からごろも君が袂たもとに馴なれずと思へば

字は昔もまずい人であったが、小さく縮かんだものになって、紙へ強く押しつけるように書かれてあるのであった。源氏は不快ではあったが、また滑稽こっけいにも思われて破顔していた。

「どんな恰好かっこうをしてこの歌を詠よんだろう、昔の気力だけもなくなっているのだから、大騒ぎだったろう」

とおかしがっていた。

「この返事は忙しくても私がする」

と源氏は言って、

不思議な、常人の思い寄らないようなことはやはりなさらないでもいいことだったのですよ。

と反感を見せて書いた。また、

からごろもまた唐衣からごろも返す返すも唐衣なる

と書いて、まじめ顔で、

「あの人が好きな言葉なのですから、こう作ったのです」

こんなことを言つて玉鬘に見せた。姫君は派手<sup>はで</sup>に笑いながらも、

「お気の毒でございます。嘲弄<sup>ちやうつう</sup>をなさるようになるではございませんか」

と困つたように言つていた。こんな戯れも源氏はするのである。

内大臣は重々しくふるまうのが好きで、裳着の腰結<sup>こしゆ</sup>い役を引き受けたにしても、定刻より早く出掛けようなことをしないはずの人であるが、玉鬘のことを聞いた時から、一刻も早く逢いたいという父の愛が動いてとまらぬ気持ちから、今日は早く出て来た。

行き届いた上にも行き届かせての祝い日の設けが六条院にできていた。よくよくの好意がなければこれほどまでにできるものではないと内大臣はありがたくも思いながらまた風変わりなことに出席している氣もした。夜の十時に式場へ案内されたのである。形式どおりの事のほかに、特にこの座敷における内大臣の席に華美な設けがされてあつて、数々の肴<sup>さかな</sup>の台が出た。燈火を普通の裳着<sup>もぎ</sup>の式場などよりもいささか明るくしてあつて、父がめぐり合つて見る子の顔のわかる程度にさせてあるのであつた。よく見たいと大臣は思いながらも式場でのことで、単に裳<sup>も</sup>の紐<sup>ひも</sup>を結んでやる以上のこともできないが、万

感が胸に迫るふうであった。源氏が、

「今日はまだ歴史を外部に知らせないことでございますから、普通の作法におとめください」

と注意した。

「実際何とも申し上げようがありません」

杯の進められた時に、また内大臣は、

「無限の感謝を受けていただかなければなりません。しかしながらまた今日までお知らせくださいませんでした恨めしさがそれに添うのもやむをえないこととお許しください」

と言った。

うらめしや沖つ玉藻たまもをかづくまで磯隠いそれける海人あまの心よ

こう言う大臣に悲しいふうがあつた。玉鬢たまかすらは父のこの歌に答えることが、式場のことであつたし、晴れがましくてできないのを見て、源氏は、

「寄<sup>よ</sup>辺<sup>へ</sup>なみかかる渚<sup>なみざと</sup>にうち寄せて海人も尋ねぬ藻屑<sup>もくづ</sup>とぞ見し

御無理なお恨みです」

代わってこう言った。

「もつともです」

と内大臣は苦笑するほかはなかった。こうして裳着の式は終わったのである。親王が以下の来賓も多かったから、求婚者たちも多く混じっているわけで、大臣が饗<sup>きやう</sup>応<sup>おう</sup>の席へ急に帰って来ないのはどういうわけかと疑問も起こしていた。内大臣の子息の頭中<sup>とうちゅう</sup>将<sup>べん</sup>と弁<sup>べん</sup>の少将だけはもう真相を聞いていた。知らずに恋をしたことを思って、恥じもしたし、また精神的恋愛にとどまったことは幸<sup>しあ</sup>せであつたとも思つた。

弁は、

「求婚者になろうとして、もう一步を踏み出さなかったのだから自分はよかつた」

と兄にささやいた。

「太政大臣はこんな趣味がおありになるのだろうか。中宮と同じようにお扱いになる気だろうか」

とまた一人が言ったりしていることも源氏には想像されなくもなかったが、内大臣に、

「当分はこのことを慎重にしたいと思います。世間の批難などの集まってこないようにしたいと思うのです。普通の人なら何でもないことですが、あなたのほうでも私のほうでもいろいろに言い騒がれることは迷惑することですから、いつとなく事実として人が信じるようになるのがいいでしょう」

と言っていた。

「あなたの御意志に従います。こんなにまで御実子のように愛してくださいましたことも前生に深い因縁のあることだろうと思います」

腰結い役への贈り物、引き出物、纏頭てんとうに差等をつけて配られる品々にはきまった式があることではあるが、それ以上に派手はでな物を源氏は出した。大宮の御病氣が一時支障になっていた式でもあったから、はなやかな音楽の遊びを行なうことはなかったのである。

兵部卿うしななみょうの宮は、もう成年式も済んだ以上、何も結婚を延ばす理由はないとお言いになって、熱心に源氏の同意をお求めになるのであったが、

「陛下から宮仕えにお召しになったのを、一度御辞退申し上げたあとで、また仰せがありますから、ともかくも尚侍ないしのかみを勤めさせることにしまして、その上でまた結婚のことを考えたいと思います」

と源氏は挨拶あいさつをしていた。父の大臣はほのかに見た玉鬘たまかすらの顔を、なおもつとはつきり見ることができないであろうか、容貌ようぼうの悪い娘であれば、あれほど大騒ぎをして源氏は大事がってはくれまいなどと思って、まだ見なかった日よりもいつそう恋しがっていた。今になってはじめて夢占いの言葉が事実に合ったことも思われたのである。最愛の娘である女御にょごにだけ大臣は玉鬘のことをくわしく話したのであった。

世間でしばらくこのことを風評させまいと両家の人々は注意していたのであるが、口さがないのは世間で、いつとなく評判にしまったのを、例の蓮葉はすつばな大臣の娘が聞いて、女御の居間に頭中将や少将などの来ている時に出て来て言った。

「殿様はまたお嬢様を発見なすったのですってね。しあわせね、両方のお家うちで、大事がられるなんて。そして何ですってね。その人もいいお母様から生まれたのではないのですってね」

と露骨なことを言うのを、女御は片腹痛く思っ何とも言わない。中将が、

「大事がられる訳があるから大事がられるのでしよう。いったいあなたはだれから聞いてそんなことを不謹慎に言うのですか。おしゃべりな女房が聞いてしまうじゃありませんか」

と言った。

「あなたは黙っていらつしやい。私は皆知っています。その人は尚侍なしのかみになるのです。私が女御さんの所へ来ているのは、そんなふうに引き立てていただけるかと思つてですよ。普通の女房だつてしやしない用事までもして、私は働いています。女御さんは薄情です」

と令嬢は恨むのである。

「尚侍が欠員になれば僕たちがそれになりたいと思つているのに。ひどいね、この人になりたがるなんて」

と兄たちがからかつて言うのと、腹をたてて、

「りっぱな兄弟がたの中へ、つまらない妹などはいつて来るものじゃない。中将さんは薄情です。よけいなことをして私を家うちへつれておいでになって、そして軽蔑けいべつばかりなさるのだもの、平凡な人間ではごいっしょに混じつていられないお家だわ。たいへんな

たいへんなりっぱな皆さんだから」

次第にあとへ身体からだを引いて、こちらをにらんでいるのが、子供らしくはあるが、意地悪そうに目じりがつり上がっているのである。中將はこんなことを見ても自身の失敗が恥ずかしくてまじめに黙っていた。弁の少將が、

「そんなふうにあなたは論理を立てることが出来る人なのですから、女御さんも尊重なさるでしょうよ。心を静めてじつと念じていれば、岩だつて沫雪あわゆきのようにすることもできるのですから、あなたの志望だつて実現できることもありますよ」

と微笑しながら言っていた。中將は、

「腹をたててあなたが天の岩戸の中へはいつてしまえばそれが最もいいのですよ」

と言つて立つて行つた。令嬢はほろほろと涙をこぼしながら泣いていた。

「あの方たちはあんなに薄情なことをお言いになるのですが、あなただけは私を愛してくださいますから、私はよく御用をしてあげます」

と言つて、小まめに下しもの童女さえしかねるような用にも走り歩いて、一所懸命に勤めては、

「尚侍に私を推薦してください」



と令嬢は女御を責めるのであった。どんな気持ちでそればかりを望むのであろうと女御はあきれて何とも言うことができない。この話を内大臣が聞いて、おもしろそうに笑いながら、女御の所へ来ていた時に、

「どこにいるかね、近江<sup>おうみ</sup>の君、ちよつとこちらへ」

と呼んだ。

「はい」

高く返辞をして近江の君は出て来た。

「あなたはよく精勤するね、役人にいいだろうね。尚侍にあんたがなりたいたいということ  
をなぜ早く私に言わなかったのかね」

大臣はまじめ顔に言うのである。近江の君は喜んだ。

「そう申し上げたかったのでございますが、女御さんのほうから間接にお聞きくださる  
でしよう」と御信賴しきっていたのですが、おなりになる人が別においでになることを承  
りまして、私は夢の中だけで金持ちになっていたという気がいたしましてね、胸の上に  
手を置いて吐息<sup>とくいき</sup>ばかりをつく状態でございました」

とても早口にべらべらと言う。大臣はふき出してしまいそうになるのをみずからおさ

えて、

「つまり遠慮深い癖が禍わざわいしたのだね。私に言えばほかの希望者よりも先に、陛下へお願いしたのだったがね。太政大臣の令嬢がどんなにりっぱな人であっても、私がぜひとお願いすれば勅許がないわけはなかったろうに、惜しいことをしたね。しかし今からでもいいから自己の推薦状を美辞麗句で書いて出せばいい。巧みな長歌などですれば陛下のお目にきつととまるだろう。人情味のある方だからね」

とからかつていた。親がすべきことではないが。

「和歌はどうやらこうやら作りますが、長い自身の推薦文のようなものは、お父様から書いてお出しくださいましたほうがと思います。二人でお願いする形になって、お父様のお蔭かげがこうむられます」

両手を擦すり合わせながら近江の君は言っていた。几帳きちようの後ろなどで聞いている女房は笑いたい時に笑われぬ苦しみをなめていた。我慢性がまんしょうのない人らは立つて行ってしまう。女御も顔を赤くして醜いことだと思っただけなのであった。内大臣は、

「気分の悪い時には近江の君と逢あうのがよい。滑稽こっけいを見せて紛らせてくれる」

とこんなことを言って笑いぐさにしているのであるが、世間の人は内大臣が恥ずかし

さをごまかす意味でそんな態度もとるのであると言っていた。

## 「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡いただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

\*\*\*\*\*

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML（一部は HTML）形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



---

一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025  
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室  
mail : [issatudo@gmail.com](mailto:issatudo@gmail.com)

---